

[ゲンロク]

# GENROQ

2018  
MAY | 5  
No.387  
特別  
定価 960Yen

特別付録 小冊子『CHEVROLET』

## THE ULTIMATE SUPERCAR マクラーレンの衝撃

マクラーレン・セナの全貌／720S & 570Sスパイダー徹底解剖

フェラーリ・ポルトフィーノの真価

ジュネーブを彩った最新スーパースポーツ

600psモンスターサルーン対決!

BMW M5／メルセデスAMG E63S／BMWアルピナB5ビターボ

GENROQスーパーカー同乗試乗会の募集開始!

スーパーカー／NSX特選ショップ





共にブラバスのボディパーツで統一しながら、ホイールだけは他ブランドに変更。S550にはHRE S104の21インチが、GL550にはハイパーフォードのHF-LC5の22インチが組み合わされた。異色のコラボを違和感なくまとめたECスペックのセンスが光る。

## 日本のストリートで異彩を放つ 漆黒のブラバス

世界中に幾多とあるメルセデス・チューナーのなかで、ブラバスは別格の規模を持つ。テストトラックが併設された7万4000㎡の敷地には最新鋭のファクトリーがあり、毎年7500台以上ものコンプリートカーが世界中へ向けてリリースされる。メルセデス・ベンツと密接な関係にあることも明白だ。ひとつの代表例な事例として、正規モデルとして日本で販売されるスマート・ブラバスが挙げられる。

# EC.SPEC BRABUS S-Class&GL-Class

近年はクラシック・プログラムにも力を注ぐものの、新型車の取り扱いを見る限り、彼らのパフォーマンス

スアッパにかけける技術と情熱には頭が下がる。持ちうる最高出力をそのまま車名とした、スーパーカー。ラインナップは、80年代後半から絶えることなくリリースされてきた。現在は、V12ツインターボを搭載したロケット900(つまりは900ps!)などを筆頭に数々のコンプリートカーが存在する。それらは過激ではあるが扱いやすく、普段は乗り手に対して従順だと評判だ。ただし、いざ本気で右足を力を入れると、最新スーパーカーを一瞬で置き去りにする性能を披露する。

さて、究極中の究極ともいべきブラバスの、そのエッセンスの一部を切り取って日本でクルールに着こなすかのような2台に出会った。福岡に本拠を構え、センスのいいカスタムコーディネートを提案するECスペックが手がけたもの。ブラバスのボディパーツを中心としてまとめられたSクラス(S550)とGLクラス(GL550)である。全身くまなく漆黒の様相で、ストリートではワルッぽさが際立っている。いや、ぱっと見はワルッぽくても、決して下品な雰囲気ではないのがブラバスらしい。同じ黒でも随所で質感を変えたり、エンブレムにクロスゴールドのエンブレムを取り入れたりと、ECスペックならではの絶妙なコーディネート術も光る。



フロントバンパー、カーボンフェンダー、カーボンリヤディフューザー、バルブエキゾーストなどがブラバス製。コンプリートカー用の製品を巧みに組み合わせたS550である。

では400km/hも視野に入っているはずで、そうした超高速領域に耐えるボディパーツばかりが揃っている。

さて、ともにブラバスのコンプリートカー風情ながら、そこにECスペックならではのハズレ技を効かせたのがホイールチョイスだった。S550はアメリカン鍛造ホイールメーカーとして最高峰に位置するHREのS104の21インチが、フロント245/35 リヤ285/30サイズのアドバンスポーツとともに組み合わされていた。GL550には気鋭の国産鍛造ホイールメーカーであるハイパーフォードのHF-LC5である。ディスクをショットアナライズドブラック、リムをクロスブラックにしつつ、張り出したワイドスターフェンダーにマッチする22インチをセットする。タイヤは前後とも305/35サイズのピレリ・スコーピオンゼロである。



ブラバスのワイドスターキットでオーバーフェンダー化されたGL550。足まわりはiDのロウリングキットで調節し、またGL63AMG用ブラバス・バルブエキゾーストも備わる。

よりブラバスらしい造形としてわかりやすいのはGL550のほうだろう。冒頭の過激なコンプリートカーに用意されるワイドスターという名のボディキットが与えられ、ぐっと幅広化している。ブラバスのワイドスターといえばGクラスが有名だが、GLクラスだって負けてはいないと再確認する。むしろGクラスよりもモダンなスタイリングが、ワイドスターの方向性と一致する。GLクラスは今や現役を退き、優しい表情を持つGLSクラスへとバトンタッチしたがゆえ、このコワモテが

でも貴重な存在にも思える。

シャーマンチューナーのど真ん中をいくような存在に、国籍の違うそれぞれのフォアジドホイールを与えておいて、ボディと同系色で違和感なく溶け込ませる。ブラバスにだってもちろんオリジナルホイールが用意されるものの、あえてハズレ技を使う。こうした大胆な手法ながら、全体を俯瞰してみると見事に調和している。さすがECスペックのコーディネート術である。

この2台はともに、決して絵に描いた餅のごとく普段は仕舞われていたものではなく、むしろ普段の足としてガンガン使い倒されているものだった。気兼ねなく付き合ってもまたブラバスらしい。いかに特別な装飾や、または過激な出力性能を有していても、乗り手に過度な緊張感を抱かせない。いかなる環境下でも使い倒せる美字がブラバスには宿る。あらためてそれを日本の地で再確認させてくれた2台だった。